

第19回特別展示

新収資料展

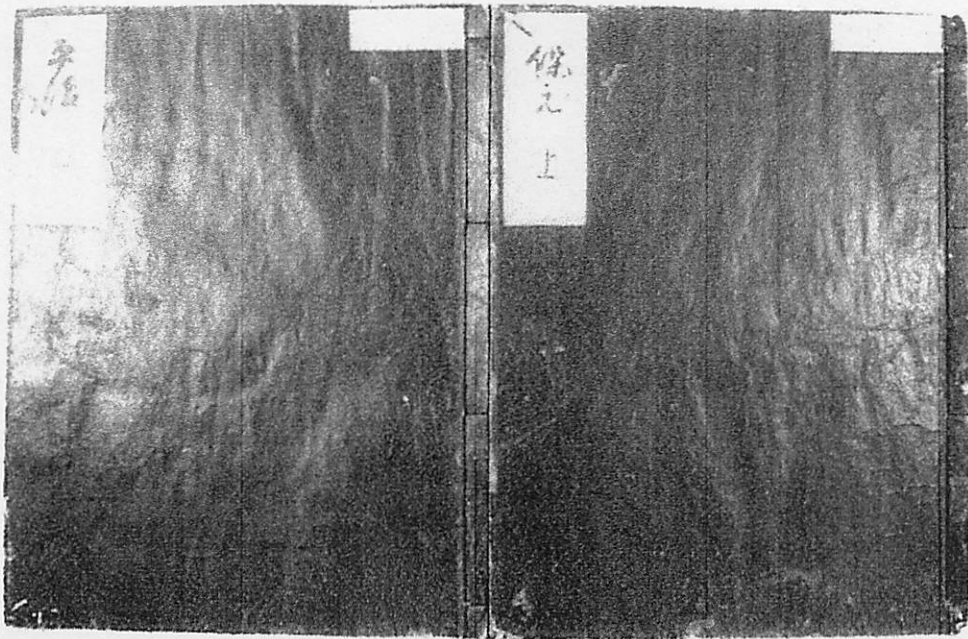
— 昭和63—平成2年度期 —



4 扇の草子 (巻頭)



4 扇の草子 (巻末)



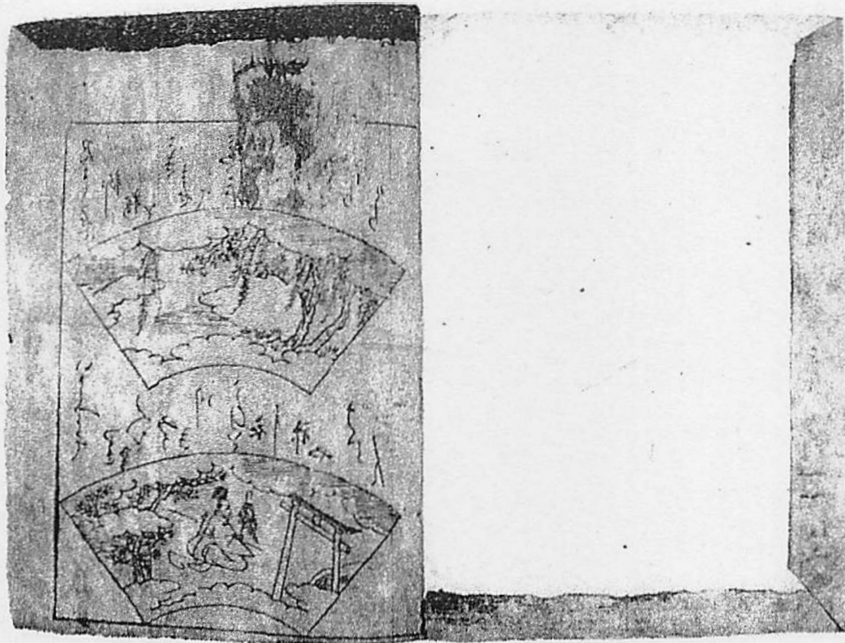
1・2 保元物語・平治物語

**保元物語 上**

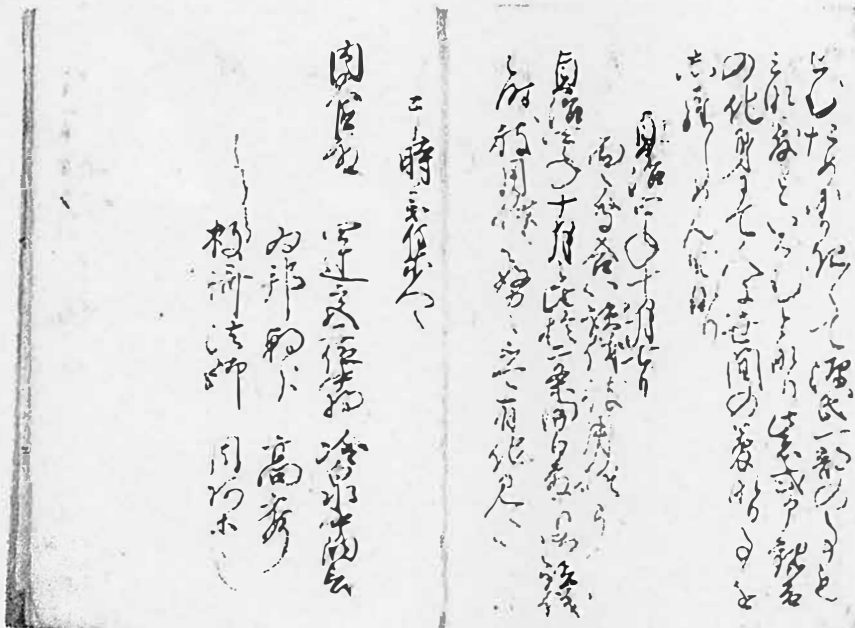
中興三手ししと所處と多和の程ははとてし大禁  
 神軍六部所來行武天皇七十代のりなりし所門  
 大徳門漢軍の守各所各確皇大なる文因法大綱を書き  
 卿の御女原和久年三月六日に御座を周毎八月十  
 なくとも也。皇統二年七月九日御座を周毎八月十  
 和のりし所處と多和の程ははとてし大禁  
 神軍六部所來行武天皇七十代のりなりし所門  
 大徳門漢軍の守各所各確皇大なる文因法大綱を書き  
 卿の御女原和久年三月六日に御座を周毎八月十  
 なくとも也。皇統二年七月九日御座を周毎八月十

1 保元物語





3 太平記抄 (表紙裏)



10 光源氏一部連歌寄合

## はしがき

国文学研究資料館では、江戸時代以前の国文学を中心とする古典文献資料のマイクロフィルムによる収集を続けるかたわら、可能な範囲内で古典籍原本（写本・版本）の収集にも努め、併せて研究者の利用に供しております。

これらの古典籍原本を、常設展示（年四回。それぞれ約三ヶ月間）・特別展示（年一回。約二週間）として一般に公開し、研究と普及とのために微力を尽してまいりましたが、第十九回特別展示を十一月一日（金）より十五日（金）まで開催いたします。

今回の特別展示では、昭和63～平成2年度期に収集した古典籍原本より代表的なものを選んで展示することにいたしました。本展示が多くのの方々の研究の進展に役立つことがあるならばまことに幸いです。

平成三年十一月一日

国文学研究資料館長 小山弘志

## 凡 例

一、この目録は、国文学研究資料館第19回特別展示「新収資料展——昭和63〜平成2年度期——」の展示資料解説目録である。

同展は、平成三年十一月一日（金）より十五日（金）までの日曜祝日を除く十二日間、当館展示室において開催するものである。

一、解説は参考室が担当した。一々お断わりしなかったが、諸先学の研究に負うところが多く、記して感謝したい。

一、書名の下に付してある番号は、当館での請求番号である。

目次

	(一)新指定貴重書	
1	保元物語	1
2	平治物語	2
3	太平記抄	2
4	扇の草子	3
	(二)一般新収資料	
5	三十六人歌合	4
6	勝語集	4
7	二四代集	5
8	玉吟集	5
9	感山雲臥紀談	5
10	光源氏一部連歌寄合	6
11	五字城・梅溪集	7
12	新撰菟玖波集	7
13	和歌灌頂次第秘密抄	7
14	しかものがたり	8
15	四十二のものあらしひ	9
16	くらひの大事・他	9
17	韻字	9
18	西谷名目	10
19	法花譯和集	10
20	一休諸国物語	10
21	遺傳集	10
22	藻塩草	11
23	誹諧小式	11
24	竹馬集	11
25	俳度曲	11
26	瀟湘八景図画詩歌	11
27	上下紀行	12
28	政宗卿百年忌勸進和歌	12
29	名賢和歌秘説	12
30	歌囊井蛙談	13



48	平賀源内実記	19
47	平賀源内実記	19
46	海国兵談	18
45	劇場一観頭微鏡	18
44	大坂芝居番附・大坂芝居絵番附	18
43	国花繁栄集	17
42	四座御役者手鑑	17
41	子供の絵本十種	16
40	烏亭焉馬作 歌川国貞画 草双紙合巻七種	15
39	ぢぐち	15
38	頼朝三代記	15
37	頼朝鎌倉実記	14
36	夢遊集	14
35	絵入女じんぎ物語	14
34	ににんびくに	14
33	吉利支丹物語	13
32	都名物露休しかた咄	13
31	扶桑撰対	13

50	玉屑帖	20
49	骨皮道人滑稽著作	19

## (一) 新指定貴重書

1 保元物語 縦二六・八×横二〇・五 写三冊

99・74・1~3

軍記物語。次項の平治物語と一括して伝来し、当館に收藏されたので、整理番号も一括して扱われる。外題は本文と同筆の題簽に「保元」(左肩)。内題は「保元物語」。室町後期書写。保存良好。藍色表紙、雷文繫ぎに牡丹唐草の押型文。三卷三冊。本文一面十行。漢字平仮名交じり。目錄なく、章段区分を示さない。異本校合と見られる書き込みあり(概ね本文と同筆、一部別筆)。上卷に本文校合の付箋あり(旧大系八六頁頭注一一に相当する脱文の補充。天理本・鎌倉本・京図本等にあり)。上卷の表紙見返しに、白河院から後鳥羽院に至る天皇系図を付す。蔵書印、「宝玲文庫」(巻首)、「月明荘」「拜土藏書」(巻尾)。宝玲文庫旧蔵で、その後ハイド・コレクションに渡り、弘文荘の仲介があったことが知られる。反町茂雄『蒐集家・業界・業界人』四七頁、同『日本の古典籍』三〇八頁に本書について触れられている。本文は全体に四類本に属する陽明文庫甲本(影印Ⅱ陽明叢書国書篇第十一集)に近く、例えば、陽明叢書解説八頁に指摘されている金刀比羅本の脱文を補い得る異文(陽明本二〇三頁、旧大系一三七頁)も、陽明甲本に等しい。しかし、下巻末尾では、四類本の末尾に相当する「きたいふしきのきへい也」に続けて、「さても為朝はい所へ流れ伊豆大嶋に月日を送りけるか」として、為朝鬼が嶋渡りの一連の記事を記す。この部分(末尾ま(一)については、所謂三類本の京大図書館本系本文を切り継いだものと見られる。諸本の展開を考える上で興味深い伝本であろう。

2 平治物語 縦二六・八×横二〇・五 写三冊

99・74・4-6

軍記物語。前項の保元物語と一括して伝来し、当館に収蔵されたので、整理番号も一括して扱われる。書誌的には前項と概ね同様。外題は本文と同筆の題簽に「平治」（左肩）。内題は「平治物語」。三卷三冊。中卷に本文校合の付箋あり（笠柴治氏『平治物語研究校本篇』一四一八〜一四二二行に該当。一類本の本文の構成改編に伴う脱落を補充したものか）。本文は、古態とされる一類本（陽明文庫本・学習院本系）と四類本（金刀比羅本系）との混態と見られる。例えば、下巻冒頭の構成は、

①頼朝青墓へ赴く（四類本の本文。但しその亜流とも言われる八行本・杉原本に近い）

②常葉都落（一類本の本文。但し情景描写や会話を多く省略した独自本文）

③頼朝生捕・夜叉御前入水（四類本の本文。但し杉原本に近い）

と、四類本の下巻冒頭の記事（①③）の間に一類本中巻の記事（②）を切り継いだ形になっている。そのため、②で「二月十日」と記した後に、③で「二月一日」の日付を記すこととなり、時間の前後を生じている。その後は四類本の本文が続くが、四類本の末尾にあたる「官人都へ上りけり」の後に一類本系本文の源家後日譚を置いて結末としている（但しこの部分は、末尾部分のみ一類本本文を混入しているとされる京師本に近い）。いずれにせよ、切り継ぎ・混態作業を経た本であるが、上巻冒頭の序文を始めとして一類本本文の占める比率は高く、伝存の少ない一類本の校訂に、また『平治物語』の本文展開の考察に、資する所の多い貴重な伝本であろう。

3 太平記抄 縦二七・八×横二〇・一 刊八冊

99・75・1-8

『太平記』の注釈書。日性（円智）著、慶長十五年（一六一〇）頃成立とされ、博引旁証で、『太平記』の注釈史上に画期をなした書として知られる。慶長・元和中刊とされる要法寺版の古活字本。四十卷八冊。十二行本。栗皮色

表紙に打付で「太平記鈔（自一至二）」と白書。蔵書印、「宝玲文庫」・「河本氏蔵書」（以上巻首）、「月明荘」（巻尾）。本来、先に当館の所蔵となった『太平記音義』（99・48）と一具の書であったと認められる。第一冊には所々訓点及び稀に人名注記などの書込あり。

なお、本書の表紙の裏打ちには五点ほど版本の刷反故が用いられている。第二・三冊の表表紙は『庭訓往来』、第六冊の裏表紙は陰刻の『千字文』、第七・八冊の裏表紙は、『扇の草子』と見られる。『庭訓往来』は有訓。無辺。字高約二三〜二三・五糎程で、一行十二字内外。一面六行かと思われるが、裁断のため確定しにくい。版心は無郭。

「庭訓」に間を置いて「三十八」と有り（第三冊）。渡辺守邦「表紙裏の反故」（国文学研究資料館調査研究報告七号、一九八六年）参照。『扇の草子』図柄は元和頃刊と言われる伝嵯峨本（東洋文庫等所蔵）の七丁表（見わたせば）「いはふとて」歌）、同裏（「いたつらに」「なげやたゝ」歌）に一致する。（本書第七冊が七丁裏、第八冊が七丁表）。

#### 4 扇の草子 縦一八・一×横三八三・二 絵巻一卷

99・73

御伽草子絵巻。箱書「阿不幾集」。ハイドコレクション旧蔵、旧ハーバード大学フォッグ美術館寄託本。金襴梅紋唐草模様表紙。六紙を継ぎ、各紙（それぞれ約一八・一糎×六三・八糎）に扇面図五と対応する和歌五首、計三十扇・三十首を記す。室町後期作か。料紙は鳥の子。金泥・銀泥・丹を豊富に使用。保存良好で、色彩は鮮明に残っている。徳田和夫「扇の草紙」絵巻をめぐる（序説）（学習院女子短期大学国語国文学会・国語国文論集二〇号、一九九一年三月）によれば、類本は、絵巻・奈良絵本・版本を含め、本書の他に八種類現存するといわれるが、本書はその中でもとりわけ古色を残す豪華本として、最も注目すべきものの一つであろう。

(一) 一般新収資料

5 三十六人歌合 縦三二×横三四一（七紙、表紙・軸付を除く） 写一軸

ヨ1・105

いわゆる三十六歌仙の歌を、歌合の形式に従って一首ずつ記す。淡黄色地に牡丹唐草の金襴表紙で、見返しは布目金箔。本文料紙は布目地に信夫と蝶をあしらった唐紙。公任撰の『三十六人撰』は、初頭の四人（人麻呂・貫之・躬恒・伊勢）と末尾の二人（兼盛・中務）は各十種、中間の三十人は各三首ずつ挙げているが、どの歌を選んでいくによりいくつかの系統に分類され、本書はこの当時、最も流布していた系統のものである。箱書に「左大臣／九条兼晴公筆 哥仙」とあり、他の兼晴筆とされるものと比較するに、兼晴筆と認めてよいと思われる。兼晴は道房の男、実は鷹司教平三男。寛文四年に内大臣となり、同五年に右大臣、同十一年に左大臣に転ずる。延宝五年（一六七七）没、三七歳。

6 勝語集 縦二六・〇×横一九・五 写・二卷二冊

ヤ4・49・1-2

仏書。諸尊法に関する東密広沢流の口伝書。勝定房恵什の談を覚引が記したもの（大正新修大藏経第七八巻に翻刻あり）。青表紙に打付で「勝語集甲（乙）」と墨書。また二冊とも表紙に「金蓮院」と墨書。上巻（甲冊）冒頭「保延元年十二月十一日於安養谷勝定房随聞記」。永仁元年（一一九三）写の本奥書（金剛資亮禅）、徳治二年（一一三〇七）の識語あり。料紙には消息の紙背を用いてあり、上巻十三丁の紙背には「正応二年閏十月」（一一八九）の文字が見える。補修あり、裏表紙見返しに安永九年（一七八〇）修復の旨を記す。異本を校合したと見られる書き込みあり。

室志和尚伝など、説話文学との共通話を引く。

7 二四代集 縦三三・二×横二四・四 写一冊

ラ・2

歌学書。流布本（精撰本）系の定家八代抄。江戸初期写。斐紙（裏打改装）、袋綴本。流布本系の奥書あり。総歌数一八〇四首（他に恋二、雑中に補記歌三首）。合点は墨掛点（樋口本の黄点）、朱掛点（同）、朱丸印（大）、同（小）、朱点の五種。本文は四辻本に近い善本。

8 玉吟集 縦二五・七×横一四〇〇・五 写一軸

ヨ1・104

藤原家隆の家集（別称『壬二集』）の四季部類歌を独立させ、配列を改編した歌集。歌数六四五首。列帖装本の改装。本来の本文料紙は斐紙九〇紙で、縦二五・七×横一五・六ないし一七・一に裁断され、糊継されている。原本の書写は室町末期、改装は江戸中期頃か。極札に「飛鳥井雅俊筆」とあり、飛鳥井流の筆跡ではあるが、雅俊よりはやや下るか。印記はなく、巻軸に、判読困難だが「田嶋次郎左衛門」と読み取れる記載が残る。内容的には流布本『玉吟集』の改編本であり、新編国歌大観本に比べて二〇一六、二〇二七、二三八三〜二三九六、二五八一の一七首を欠くが、このうち二三八三〜二三九六の一四首は、一丁分の落丁によるものと見られる。一方、春部に後度百首の一三三、六百番歌合の三〇二・三一二の三首が加わっている。全体として、収録歌は流布本四季部と大きな相違はないわけだが、歌順と詞書表記には異同が多く、流布本よりも歌題・歌材ごとにまとめようとする傾向、流布本で分載されている同一歌会歌をまとめてゆく傾向が見られ、また、二〜四首ずつ歌題を前にまとめて一行に表記し、その後に歌のみを連続して記載するなどの特徴が見られる。家隆歌の本質を簡略化した形で鑑賞把握するための改編歌集と考えられる。

9 感山雲臥紀談 縦二五・五×横一七・四 刊一冊

ワ3・27

禪籍。南宋晝螢撰述。五山版『感山雲臥紀談』（貞和二年＝一三四六刊）の寛永中刊の付訓覆刻本。蔵書印、「鴨下」（巻頭）、「柴田文庫」（巻尾）。盛敗あるも完本。序の部分に大量の書込注記（墨・朱）、全体にわたって朱引・注記あり。伝本稀少。

10 光源氏一部連歌寄合 縦二一・五×横一五・八 写一冊

タ・8

『光源氏一部連歌寄合』は、これまで知られている唯一の伝本である天理図書館蔵本（『銘肝腑集鈔』の内）が貞治四年（一三六五）の奥書を有しており、源氏寄合を作ったとする『九州問答』の記事との符合、貞治三年に行阿から『原中最秘抄』を伝授されていることなどから、二条良基の手になるものと推定されている。本書はそうした従来  
の推定を裏付ける記事を持つ、未紹介の新出資料であると思われる。

天理本の奥書とほぼ同内容の記述の後、「貞治四年十月之比於二条関白殿下御談儀ノ之時被用捨云々努々不可他見云々」と、二条良基のもとで「御談儀」のあったことが明記され、さらに「于時参集人々」として、寄合作成に協力した人物たちの名が「内大臣殿（師良）、四辻宮二位中将（善成）、冷泉中納言（為秀）、為邦朝臣、高秀、救済法師、周阿等也」のごとく挙げられている。なかでも『河海抄』の著者である四辻善成の名が記されていることは、善成による源氏物語講釈の聞書である『千鳥抄』にも源氏寄合が含まれていることと合せて注目されよう。

本書は「源氏聞書」「六帖和調集抜書」とともに合綴され、薄茶色の反故紙をもってくるみ表紙とする、墨付25丁の一冊本。本文料紙は楮紙。天文二年（一五三三）の書写奥書を持つ。「源氏聞書」は作中人物と寄合の詞の簡単な解説。「六帖和調集抜書」は、連歌寄合の形成に参与していたと指摘されている（稲田利徳「新撰六帖題和歌」と連歌寄合―「連珠合璧集」を中心に―、『連歌研究の展開』、勉誠社、一九八五年）『新撰六帖題和歌』から62首の歌を書き抜いたもの。『光源氏一部連歌寄合』ともども、付合の参考書として使用されたものであろう。

天理本と比較するに、相互に寄合語の誤脱を訂正しうるばかりでなく、天理本ではほとんど全て無視されてしまっている、「女車（婦）」というような割注で書くことによって寄合語であることを示す記載方法が、資料館本では概ね守られていること、また『源氏物語』の展開に従って寄合語が並べられていることなど、原本の面影をよりよく伝える貴重な伝本である。

11 五字城・梅溪集 縦二五・八×横一七・二 写・合綴一冊

タ8・2

五山漢詩集。表紙には打付で「五字城」と墨書。『五字城』は五山連句約四〇巻を雜纂したもので、月舟・横川の点を朱で書き入れている。ほぼすべての巻が内閣文庫本『梅花無尽蔵』に見出される。『梅溪集』は七絶を主とした五山詩集。「靈兆」「江竜／紹泰主」と記名あり。破損若干あり。

12 新撰菟玖波集 縦二二・八×横一五・五 刊十冊

タ3・5・10

連歌集。二十巻。紺表紙。第一冊を除き、題簽「新撰菟玖波集」(三四)「部分的に残存。明応四年(一四九五)序、作者部類を付す。刊記は無いが、寛保三年(一七四三)版と同板。蔵書印「渡辺千秋蔵書」「小汀文庫」。

13 和歌灌頂次第秘密抄 縦二四・三×横一七・四 写一冊

タ2・93

家隆仮託の歌学書。内題「一宗次第灌頂秘密」(その右に「家隆方 六条とも云 定家六条とも云」と記す)。奥書「延宝二年甲寅六月二日 山州於山科寺書写 山本秀俊無諛軒 法名光謹自祐」。伝本は多く、三輪正胤「家隆仮託書の検討——「和歌灌頂次第秘密抄」をめぐって——」(大阪府立大学紀要19巻、一九七一年三月)によって二系統に分類されるが、そのいずれにも属さない大幅な増補が全体にわたって目立つ。例えば、冒頭には「夫和哥と者神代より伝て人の翫となると云は」という他本と概ね同様の書き出しに続けて、「未天地分天上人間なし」云々と、天地分化のことを記し、天神七代を列挙する。素盞鳥尊の誕生を記した後には地神五代を列挙する。その他、増補は



枚挙に遑なく、全体に、大まかな骨格を『和歌灌頂次第秘密抄』に借りながら、神仏説による記事を随所に増補して作り直した別作品とさえ言える趣を呈している。

14 しかものがたり 縦一六・五×横二三・七 横本 写一冊

タ4  
37

室町物語。志賀物語（別称『堀川の中納言の姫君』）。外題、題簽（表紙中央）に「しかものかたり」と墨書。内題無し。藍表紙に金泥で草花模様を描く。見返しに金箔を散らし、本文の料紙は鳥の子紙。一面十二行、平仮名に時折漢字を交える。墨付二十一丁、そのうち八丁は片面が切り取られている。奈良絵本の絵抜き本と見られる。絵の位置は左記の他本とは一致しない。江戸前期写か。この作品の伝本としては東大国文研究室本（翻刻Ⅱ室町時代物語大成）・久原氏旧蔵本（翻刻Ⅱ古典文庫・室町時代物語二）・金刀毘羅宮本・龍谷大学本（存巻下。翻刻Ⅱ龍谷大学国文学叢書・中世物語集一）の四つが知られている（いずれも奈良絵本）。松本隆信「擬古物語系統の室町時代物語」（斯道文庫論集第四輯、一九六五年三月）、三角洋一「散佚物語と物語草子」（中世文学研究第四号、一九七八年七月）により、いずれも本文に大きな異同はないとされるが、本書はこれらの本文を訂し得る箇所をいくつか有する点で、注目すべき伝本と言える。とりわけ注目すべきは冒頭の主人公の紹介部分である。即ち、前掲の他諸本は、全体として主人公を「少将」、その父を「大納言」と呼ぶにもかかわらず、冒頭では主人公を「大なこんみちたかと申人おはしける」と紹介し、矛盾があるのだが、本書には該当部が「大なこんみちたかと申人の御こにせうしやうたかみやと申てんしやう人のおはしける」とあり、これによって本作品の主人公の名が「少将たかみや」であることが初めて知られるのである。その他、末尾には本文に続けて同筆で「かしこきもおろかなる身もつるにゆくみちをしらせんふてのあとかな」の歌を記すなど、前掲四本の異同の少なさに比べれば、他にも注目すべき異同が認められ、本作品の本文を考える上では重要な位置を占めると見られる。

15 四十二のものあらそひ 縦三〇・三×横二三・二 写一冊

ラ・3

室町物語。外題なし。内題「源氏四十二物あらそひ」(扉題)。茶表紙。大型本。近世初期写(慶長頃か)。一面七  
く九行、漢字平仮名交じり。絵は無し。蔵書印無し。見返しに「綿町志方屋」と墨書。伝本が多く、また諸本に異同  
の多い作品として知られ、真下美弥子「御伽草子『四十二のものあらそひ』考」(国語と国文学一九八五年九月)に  
は四十二本が紹介されている。和歌の有無や配列に関する限り、真下論文の紹介する四十二本の中では、書陵部蔵八  
洲文藻本に最も近いが、同本と比べてもなお和歌二首(35「なむししん」42「おもひいる」)を欠き、完全に一致す  
る伝本を見ない。現存最古とされる赤木文庫本と比較した場合、字句の異同も多い。末尾、赤木文庫本その他に共通  
する帝の還御の後、改行なく続けて「めてたくく源氏は木々のつれなきを見て」云々との記事(十八行程。歌五  
首を含む)を記す。最終丁裏には「みよし野山よりふかき物や有と心にとへは心成けり」の歌を一面に記す。

16 くらひの大事・他 継紙十枚、縦一八・五×横八三〇

ヨ・4  
ヨ・8

室町末期の謄伝書。料紙の長さは、第一紙(五二纏)と最終紙(一三纏)とを除いて、各九五纏程度。本文は一行  
一二〜一六字程度で、全四六〇行。室町末く江戸初期写。冒頭に「くらひの大事」と題した百十番の曲の位について  
の記事があり、「右百十番のくらひ書二百番にあたるへき者也」の識語の後、「又扇之大事」(二条)、「まくのあけや  
うの大事」(五条)、「おもての大事」(二条)、「心之大事」(二条)と、演能についての心構えを記した条が続く。  
巻末に「右此大事親世弥次郎／書物健写進入申者也／親世小次郎／元龜元年五月三日元頼」の識語があるが、花押は  
なく、元頼自筆とは断定し難い。類本は多いが、「音曲秘伝」に相当する記事が他の諸本では八十九番のみであるの  
に対し、百十番すべての記事が揃っており、しかも曲の順序に秩序だった配列意識が感じられる点、注目される。

17 韻字 縦一八・五×横一三・五 写二冊(乾坤)

マ・3  
マ・49・1

略韻の一つ。乾冊に上平、坤冊に下平の韻字と用例を集める。冒頭に諸宗についての雑記があり、その最後に「永禄乙丑暮春吉日鹿苑仁如集堯印」とあり（永禄八年は一五六五）、仁如集堯所持本からの転写本であることが知られる。仁如集堯は相国寺僧、天正二年（一五七四）没、九二歳。文字の配列は基本的には聚分韻略に従い、「外（聚分韻略にない字）」「祖」「氏」が累加されている。朱引き入。末尾に四言句集あり。

18 西谷名目 縦二八・〇×横一九・三 刊二冊

ヤ4・50・1~2

仏書。外題・題簽『西谷名目』。内題『天台円宗四教五時西谷名目』。天台宗学の教理を初学者に向けて説く。著者・成立時期は不明だが、おおよそ室町時代、比叡山東塔西谷の学僧の手になるものと見られる。古活字本。版心「名目（上下）」。「蔵書印」、「小汀氏蔵書」「平等心王院」。二冊とも、裏表紙見返しに「主空俊」「施主善曳房」と墨書。

19 法花譯和集 縦二七・四×横一八・三 刊・五卷五冊

ナ2・209・1~5

法華経文歌の注釈書。武州星野山実海撰。承応二年（一六五三）風月堂庄左衛門板。改装裏打本。見返しに法華経二十八品の教理要旨の書き入れの他、本文中にも若干の注記がある。

20 一休諸国物語 大本五冊

ナ4・407・1~5

仮名草子。内容は先行の諸書から話を適当に抜き出して、主人公を一休に置き換えたもの。本書は巻一・二、巻三・四、巻五の三種の取合せ本。巻五は初版本で、左肩に「繪一休諸国物語 五」の題簽を有し、「寛文十二壬子曆如月上旬 寺町二条上ル町 表紙屋庄兵衛板」の刊記を持つ。従来、刊記を大幅に削った後刷本しか知られていなかった。

21 遺傳集 縦一四・七×横一八・〇 写一帖

ナ3・71

近世初期成立の連歌作法書「いろは新式」の一本。横本・列帖装で、後補の紙表紙の左肩に「遺傳集」と墨書。本文は『無言抄』系だが、記事はより簡潔。巴（紹巴）・仍（玄仍）、玉（玉玄か、未

詳)の説を多く引く。

22 藻塩草 大本十冊

タ3  
・7

宗碩編の連歌辞書。寛文九年刊、古活字覆刻整版本。天象・時節・地儀などの二十部に分類配列する。連歌を詠む者のために古文獻より語句を書き集め、語によっては出典や用法を説く。「矢盛文庫」の印記。

23 俳諧小式 縦一三・六×横二〇・一 横本 刊一冊

ナ3  
・68

俳諧作法書。山岡元隣著、寛文二年自跋。同年の求心子の序あり。題簽剥落。序題「俳諧小式序」。本文は三十一  
条と追加一条にわたり、貞文俳諧の作法を具体的に説く。

24 竹馬集 中本一冊

ナ3  
・72

連歌付合書。明暦頃刊。もと六冊本(巻一〜二、巻三〜五、巻六上、巻六下、巻七〜八、巻九〜十)であったが、  
改装されて現装は一冊本となっており、他本にみられる「京姉小路堀川東江入町 中川茂兵衛 同弥兵衛」の刊記は  
ない。四季の部(巻一〜四)を月別とし、ついで恋(巻五)、名所(巻六)、述懐・釈教・神祇・旅(巻七)、山類・  
水辺・居所・植物(巻八)、生類(巻九)、空天并雜(巻十)の部立に、句作・付合の詞をあげ例歌を引く。

25 俳度曲 半紙本 二卷二冊

ナ3  
・69

俳諧撰集。原題簽なし。取合せ本。上巻のみ改装裏打本で落丁が多い。豊島治左衛門(識月)編。沾洲跋。「享保  
七<sup>壬</sup>年林鐘吉日」自奥。「江戸日本橋南一丁目/萬屋清兵衛板」。観世流の謡曲名(上下巻各百十番)を題とする絵と  
発句を一組にして、それを半丁ごとに配した絵俳書。

26 瀟湘八景図画詩歌 縦三〇・〇×横二〇・〇 折帖大本一冊

ナ8  
・3

元禄八年刊。吉田五平次書、長谷川等雲画。網目に菊花を型押しした薄茶色の表紙中央に、「瀟湘八景<sup>図畫</sup>詩歌」と題簽

を貼る。本文は詩歌一枚八景画一枚の計十六面、巻頭巻末に一種ずつ画を配し、扉絵あり。当時八景詩歌の代表であった玉欄と為相の作を雲母引きの奉書にたっぷりした和様であしらう。「月明荘」「拜土藏書」の印記。

27 上下紀行 縦一七・二×横二三・六 写一帖

ナ5・41

仁木省二沙弥充長の『季秋吟行』と『都餘波』の合写本。前者は享保六年九月三日出立の東海道の旅、後者は京都の滞在を終わって江戸へ帰着するまでの旅の歌日記風の紀行文である。前者の末尾に「仁木省二沙弥充長」、後者の末に「享保七年九月十一日仁木省二沙弥充長」、また本書巻末に「享保八年卯十月 藤義休鋭書」とある。

28 政宗卿百年忌勸進和歌 縦二六・〇×横一七・六 写一冊

ナ2・291

享保二十年五月二十四日、伊達五代藩主吉村の勸進による藩祖政宗の百回忌追善和歌。氷割れに秋草模様をあしらった淡黄色の紙表紙で、見返しは本文共紙、楮紙。袋綴一冊本。墨付35丁で前後に遊紙各1丁、一面7行。題簽中央「享保貳十年五月廿四日／政宗公百年忌勸進和哥」。「郭公催懷舊」の出題は冷泉為久。公家・諸侯・婦人・積門士庶・家臣の二〇八首と政宗辞世を冠に置く吉村の三十一首詠。原本は松島瑞巖寺蔵。本書は伊達家の手控本か。土庶詠に江戸歌壇の顔振れがうかがえる。

29 名賢和歌秘説 縦二三・一×横一五・七 写一冊

ナ2・295

原題『和歌物語』。南嶺多田義俊が堂上諸家の言説を集成し、寛延元年（一七四八）口述筆記して成立した歌学書。作歌故実の他、堂上歌人等の逸話・秘伝などを広く収めたところから歌壇に迎えられる流布した。鈴木淳氏の論によると（『近世和歌文学誌』第一集、一九八四年）、約三十本を数える伝本の伝来経路は、地下官人層と武家層に大別されるが、後者では「名賢和歌秘説」と外題される諸本が、旗本小宮山昌世書写本を源流として数多く伝写されたことなどが知られるという。本書は、江戸武家歌壇での源流本になったという、小宮山昌世筆本そのものである。

袋綴一冊本。亀甲窠文繋ぎに龍文様を型捺しした濃綠色臘引き表紙の左肩に白紙題簽を貼り、「名賢和歌秘説 全」と外題を墨書。本文料紙は楮紙。墨付四四丁、遊紙後一丁。見返しに貼紙が一枚付されている。一面十一行書きで、明和二年乙酉五月の小宮山昌世の序（自筆、「源氏」「昌世之印」を捺す）一丁。本文は「名賢和歌秘説」と内題し、一つ書きで八五項が第二丁から第四四丁才まで記され、四四丁ウに「甲申夏六月十三日」の昌世の書写奥書がある。本文の全体にわたって、墨・朱・青墨による書入れの注記・合点が夥しく記入されている。昌世自身による注と推定される。印記は前記序末の昌世の二種の他に、巻頭第一行右肩に「信而好古」の楕円印がある。

30 歌囊井蛙談 三卷三冊

ナ2  
292・1-3

寺町百庵の歌学書。茶表紙二一・八×一五・七。匡郭四周单边。内題下に「濱類蟹子百庵言滿著述」とある。刊記「宝曆十一載辛巳九月日／東都書林 日本橋南一丁目須原屋茂兵衛／橋本町二丁目近江屋源七」。朱筆書入少々。印記「渡辺千秋藏書」「尺如堂図書記」「小汀文庫」。

31 扶桑撰対 写三卷三冊

ヤ2  
125・1-3

茶表紙二五・二×一九。「扶桑撰対」（目録題）。林鶯峰著。国史上の人物の伝を漢字片仮名交じりに各部類二名ずつ掲出。松平忠房の請に応じた三六類七二名の叢伝は、画像を作り六曲一双の屏風に仕立てることを期したもの。延宝五年鶯峰跋。本朝三十六対小伝とも。西荘文庫旧蔵。

32 都名物露休しかた咄 半紙本合一冊

ナ4  
387

咄本。表紙二〇×一五・三。匡郭四周单边一七・四×横一三・三。卷五欠。話数は卷一・一七話、卷二・一六話、卷三・一七話、卷四・八話（目録には一二話。本文は第九話以下欠）。

33 吉利支丹物語 縦二五・八×横一八・〇 二卷二冊

ナ4  
410・1-2

仮名草子。内題「吉利支丹物語」、下巻原題簽には「吉利支丹御對治物語下」とある。茶色表紙。下巻末尾に「寛永十六卯稔八月吉祥日」とある。柱刻は「吉上（丁数）」「吉下（丁数）」、上巻二七丁・下巻二三丁。行数は八行である。ヨーロッパ人を観察した好資料でもある。再版本に『吉利支丹退治物語』がある。

34 ににんびくに 中本二巻合一冊

ナ4  
409

上巻内題「ににんびくに」。下巻内題「二人びくに」。子持の原題簽に「二人ひくに」とある。鈴木正三著、仮名草子。紺色、亀甲、龍図表紙二三・五×一八・三。匡郭四周单边一六・六×一二。江戸版「宝永七寅正月吉祥日 通油町／井筒屋三右衛門板」の刊記がある。「山谷重箱」「骨董舎」「骨董古雜籍珍書舖咸亨堂」「永田文庫」「残花書屋」「資南」「怡顔」「虚山房主之藏」「アカキ」の蔵印。帙裏に識語「昭和十四年九月三日浅くらにて求む はまを」あり。下巻第五丁、第九丁に脱文がある。

35 絵入女じんぎ物語 大本二冊

ナ4  
397・1・2

仮名草子、女訓もの。雷文繋ぎ唐草空押模様黒色表紙二五・八×一七・四。匡郭四周单边二三・六×一六。原題簽。巻尾に「此物かたりは女四しよのぎりなるによつてかなにかきをんなじんぎものがたりと名つけ侍る」とある。無刊記。

36 夢遊集 四巻合一冊

ナ4  
380

表紙紺色紗綾形唐草空押模様二七・四×二〇。匡郭四周单边二二・二×一六・八。題簽「絵入ねさめ草 二」（双辺）。内題「夢遊集卷之一（三・四）」。刊記「寛文十三癸丑初春吉旦 松会開板」。上方版の『夢遊集』を字詰を密にして版を作りなおし挿絵を加え、四巻に仕立て、外題のみ「ねさめ草」とした江戸版。

37 頼朝鎌倉実記 縦二四・一×横一七・八 五巻合一冊

ナ4  
382

浮世草子。其碩・自笑序。享保十二年正月八文字屋八左衛門版。粗本で巻末をコピーで補充。八文字屋伝本中伝本の少ないもの。

38 頼朝三代記 縦二六・六×横一八・七 四卷合一冊

ナ4 381

題簽「頼朝頼朝三代記 四」(剥落あり)。刊記「宝永六己丑歲九月吉祥日 大阪心齋橋筋安堂寺町秋田屋／大野木市兵衛板行」。裏打本。挿絵(見開き十二面入り)のすべてに、後人の丹緑黄の筆彩あり。

39 ぢぐち 縦一八・二×横一三・〇

ナ4 408

柱刻に「ぢぐち」とある。匡郭十五・三×一・六。第一丁上欄に鶴屋の商標がある。全五丁。地口を草双紙に仕立てた。

40 烏亭焉馬作 草双紙合巻七種

歌川国貞画 妖狐天網島 上中下三冊(各十丁)

ナ4 404 1~3

天保三年刊 江戸芝神明前三嶋町 和泉屋市兵衛版

戲場稿本當現建三編 上下二冊(各十丁)

ナ4 404 4~5

天保三年刊 江戸馬喰町二丁目角 永寿堂西村屋與八版

両顔忍夜桜 前編(上下)、後編(上下)、四冊(各十丁)

ナ4 404 6~9

天保四年刊 江戸芝神明前三嶋町 和泉屋市兵衛版

刈萱桑門筑紫の写絵 上中下三冊(各十丁)

ナ4 404 10 12

天保二年刊 南傳馬町 紅英堂版

花兄魁綴紙 上中下三冊(各十丁)

ナ4 404 13 15



天保六年刊 江戸馬喰町二丁目 山口屋藤兵衛版

當世噺推故傳 上下二冊 (各十丁)

ナ4  
404  
16  
17

弘化五年刊 江戸通油町南側 藤岡屋慶次郎版

俳優茶屋雜談越路之怪 上下二冊 (各十丁)

ナ4  
404  
18  
19

天保十一年刊 江戸芝神明前三嶋町 和泉屋市兵衛版

41 子供の絵本十種

絵本豆腐記

ヤ8  
95  
1

行成表紙、縦二一・二×横一五・二。匡郭四周单边一七・四×一三・三。原題簽。丁数十丁(二〜三欠)。

化粧なぞ雪の水

ヤ8  
95  
2

紺表紙、縦二一・二×横一五・五。匡郭四周单边一八・二×一四。原題簽。丁数、三丁裏〜九丁表。

順風湊入船

ヤ8  
95  
3

行成表紙、縦二一・二×横一五・五。匡郭四周单边一七・五×一三・五。原題簽。丁数、二丁裏〜八丁表。

祝言狐のむこ入

ヤ8  
95  
4

紺表紙、縦二一・四×横一五・四。匡郭四周单边一八・四×一三・五。原題簽。丁数、一丁表〜六丁表。

絵本福寿笑顔湊

ヤ8  
95  
5

鼠色表紙、縦二二×横一五・三。匡郭四周单边一七・六×一三・八。原題簽。丁付(下一〜三、下五〜七、下九〜

十一、十二)。

絵本唐勇傳

ヤ8  
95  
6

紺表紙、縦二一×横一五。匡郭四周单边一六・二×一三。原題簽。天満屋安兵衛版。丁数、一丁裏く六丁表。

表ほんなげうのうみ  
繪本武勇海

ヤ8・95・7

紺表紙、縦二十一・三×横一五・一。匡郭一六・三×一二・七。原題簽。天満屋安兵衛版。丁数、一丁裏く六丁表。

繪本花甲

ヤ8・95・8

紺表紙、縦二一・四×横一五・五。匡郭四周单边一八・二×一四・〇。原題簽。丁数、一丁表く六丁表。六丁裏に

「京寺町通松原上ルひしや治兵衛板」とあり。

げんけよつくるま  
源家四津車

ヤ8・95・9

行成表紙、縦二一・八×横一五・七。匡郭一八・〇×一三・〇。原題簽。丁数、一丁表く七丁表。

しちふくねつみてうじやまづくし  
七福鼠長者絵尽

ヤ8・95・10

紺表紙、縦二一・三×横一五・二。匡郭一七・八×一三・五。原題簽。丁数、二丁裏く七丁表。

以上十種、およそ享保から寛政ごろの上方版。

42 四座御役者手鑑 横本 刊一冊

ヤ8・99

二冊のうち下巻のみ存。題簽剥落。観世・宝生・御部屋役者・惣役者衆取次の計47名収録。新九郎が宝生に属し、元禄二年没の梅若兵九郎は載らず、元禄八年没の鷺山三郎は載る。將軍蟲貞の宝生座の繁栄を示す好資料。「鴻山文庫」の印記。

43 国花繁栄集 縦二二・七×横一五・八 五卷五冊

ヤ8・91

歌舞伎絵づくし集。原題簽「国花繁栄集 一（く五）」。表紙薄様。天明五年序。序文（書肆問月堂誌）によれば、大坂の「角の芝居の狂言絵づくし」を五年このかた集めたもの。第一巻には安永九子年の絵づくし（座本芳沢いろは）

「千集萬歳千箱贈 亥十一月二日より夜十日昼十日間」以下八点、第二巻には天明元丑年の絵づくし（座本芳沢いろは）、「正八幡再来祐殿勝鬨 子十一月二日より夜十日昼十日間」以下十点、第三巻には天明二年寅年の絵づくし（座本藤川山吾）、「天赦萬義経蟲負 丑十一月三日より夜十日昼七日」以下十二点、第四巻には天明三卯年の絵づくし（座本藤川山吾）、「倭文字三才図会 寅十一月十日より夜十日昼七日間」以下十二点、第五巻には天明四辰年の絵づくし（座本藤川菊松）、「蓬萊山改顔見世 辰正月朔日より夜十日昼三日間」以下十二点を収録している。

44 大坂芝居番附・大坂芝居絵番附

ヤ8・100〜101

大坂の歌舞伎の、役割番付（約一九〇点）、絵尽し（約一三〇点）を集成している。役割番付は、天保期と嘉永・安政期の、中の芝居・角の芝居のものが大半であるが、化政期のものや宮地芝居のものも数点含まれている。絵尽しは、文化中期から弘化・嘉永期にかけての道頓堀各座のもの。いずれも表紙は、合羽摺による彩色が施されている。なお、役割番付の紙背資料として、見立番付・摺物の類が多数あり、これも興味深い。

45 劇場一観頭微鏡 半紙本 刊絵入四冊

ヤ8・96

黙々漁隠著・歌川国貞画。文政十二年序・文政十四年刊。「芝居見物の初心の人」を対象とした歌舞伎概説書。啓蒙色の強い記述で、内容は、総論から役者の位附の見方、役柄の歴史と分派についての考察、観客論に及ぶ。なかでも江戸・上方それぞれの番付の見方の解説は、具体的かつ詳細をきわめており、ユニーク。役柄の解説を兼ねて、東西の名優の当り芸を描く、国貞の彩色画十二葉を収める。

46 海国兵談 縦二五・九×横一八・〇 大本十六卷八冊

ヤ9・172・1〜8

海防軍事書。林子平著。天明六年序。表紙は鼠色格子で、原題簽「海国兵談 一（〜八）」。匡郭四周単辺一九・二×一三・三。第一巻見返しに「仙臺林子平手述／頌同志／海国兵談／活版 換耕書限十部」、自序末に「天明六年

- ⑪ 「寓意諷諫滑稽文章」ヒ4 274 明治二十年十二月、共隆社刊。
- ⑫ 「上等佳言娛目数誌」ヒ4 275 明治二十一年八月二十八日、共隆社刊。
- ⑬ 「二十三年前滑稽議員」ヒ4 276 (内題下に「滑稽道人編輯」とある)。明治二十一年十月、岡本平九郎刊。
- ⑭ 「常談半分独り言」ヒ4 277 明治二十一年十一月、共隆社刊。
- ⑮ 「心学道話物知顔」ヒ4 278 明治二十二年二月、共隆社刊。
- ⑯ 「滑稽十二ヶ月」ヒ4 279 明治二十一年十一月、金桜堂刊。
- ⑰ 「行成放題楽雅起」ヒ4 280 明治二十二年三月、金桜堂刊。
- ⑱ 「おどけ新聞」ヒ4 281 (内題「おどけ新文」。明治二十二年三月、金桜堂刊。
- ⑲ 「珍紛閑噴寝言」ヒ4 282 明治二十二年五月、自由閣刊。
- ⑳ 「滑稽記事論説文」ヒ4 283 明治二十三年八月、大阪、梅原忠蔵刊。
- ㉑ 「滑稽記事論説戯範」ヒ4 284 明治二十三年十二月、日本橋、小林喜左衛門他刊。
- 表紙絵あり。明治二十年より二十三年刊。価格金二十銭より五十銭。貸本屋のラベル(第十六号、壹週間金一銭)あり。骨皮道人は本名、西森武城(文久元く大正二年)。東京生。東京市神田区錦町二丁目三番地、のち東京市浅草御藏前片町二十番地。世相、風俗に取材する滑稽文学作家。

50 玉屑帖 一冊

ラ 3  
15

仏書の稀本零葉集。全四十四葉。昭和二三年四月、禿氏祐祥古稀・高雄義堅華甲を祝って、龍谷大学史学会・仏教史学会有志が編んだもの。古写経八葉(大般若経・唐代等)、大藏経十一葉(雜阿含経・宋版等)、古刊本十六葉(法華音義・宋代刊等)、及び真宗古典零葉九葉(教行信証延喜・室町後期等)を貼る。

丙午夏 仙臺 林子平自序」とある。

47 平賀源内実記 紫色表紙(和装活字本) 縦一七・二×横一一・八

ウ4・52・A

題簽「平賀源内実記」。明治十六年・朝陽館刊。

48 平賀源内実記 ボール表紙 縦一八・二×横一二・三

ウ4・52

刊年・発行所は右に同じ。表紙に「風来山人一代記」「田島象二著／近世奇才／平賀源内実記／朝陽館刊行」とある。

#### 49 骨皮道人滑稽著作

瘦々亭骨皮道人著のボール表紙本。表紙、縦一八・五×横一二・三。書名は、

① 「滑稽独演説」ヒ4・265 明治二十年四月出版、共隆社(京橋区銀座二丁目六番地稗史小説出版元)

② 「続滑稽独演説」ヒ4・266 明治二十年十一月出版

③ 同右 ヒ4・266 A 同右(表紙に異同あり)

④ 「滑稽国夢物語」ヒ4・267 (内題「奇々妙々滑稽国夢物語」)。明治二十年十一月出版、金桜堂。

⑤ 「滑稽狂進怪」ヒ4・268 (内題「面白奇文狂進怪」)。明治二十一年六月出版、金桜堂刊。

⑥ 「滑稽一口演説」ヒ4・269 明治二十二年五月、共隆社刊。

⑦ 「田舎模様」ヒ4・270 (内題「倉作田舎模様」) 明治二十二年九月、共隆社刊。

⑧ 「楽しみ草紙」ヒ4・271 明治二十二年十二月、共和書店

⑨ 「滑稽紙屑問屋」ヒ4・272 明治二十三年四月、杉本書店刊

⑩ 「面白誌」ヒ4・273 明治二十三年四月出版、金桜堂蔵板。

国文学研究資料館特別展示目録 13

新収資料展——昭和63（平成2年度期）——

平成三年十一月一日 発行

編集 国文学研究資料館

整理 閲覧部 参考室

発行 国文学研究資料館

〒142 東京都品川区豊町一―一六―一〇

TEL 〇三―三七八五―七二三一

印刷・製本 株式会社 三協社

〒164 東京都中野区中央四―八―九

TEL 〇三―三三三八―三―七二八一

ISBN4-87592-036-9